

## 研究の棗

# 日本古建築研究の棗 (第三十三回)

天 沼 俊 一

### 第三十四 窓(中の中)

桃山時代の續き

第二八七圖は仙臺市大崎八幡神社拜殿の花頭窓である。實は窓といふよりも、花頭形の孔といった方がいゝかも知れぬ。理由は拜殿と石の間との間にある建具なしの空隙であるからである。いふ迄もなくこの建物は神社建築である。花頭窓といふものは佛寺建築に用ひられたる窓である。してみると元來寺にあるべきものが宮にあるのであるから、これ即ち佛寺建築の細部が神社建築に影響

した結果であることが判るであらう。敢てこれのみではない、虹梁大瓶束・木鼻・勾欄・礎盤等、寺のものが宮の方へ影響したのはいくらもあるけれども、どうもこれは特に目立つのである。さうしてこの時代になつてくると、この種の窓が神社にも住宅にも茶室にも用ひられたのである。

この建物には窓のみではない。勾欄にも大變面白いのがあるので、いづれ後に例に引くつもりであるが、何にしろ寺の要素が頗る濃厚に入り込んでゐるから、當然といへばそれ迄であるが、其點

に於いて大に興味があるのである。

第二八八圖は大阪市天王寺區夕陽丘 (Yuhigaoka) の勝鬘院多寶塔の窓で、内部に盲連子を入れてあるが、其框の面はいやに角がたつて、おそろしくかた苦しい感のあるものである。これと教王護國寺金堂連子窓(第十四卷第二號第六十九頁參照)の框と比較すると框の性質は殆んど同じことが判るであらう。

\* \* \* \* \*  
こゝで一つ斷つておかねばならぬことがあるのは、先づ江戸時代迄社寺の分を最初に掲げ、次に住宅茶室等の分に及ぼすやうにしやうかと思つたが、桃山時代の分を最初に片付ける方がよさうなので、さうすることにした。

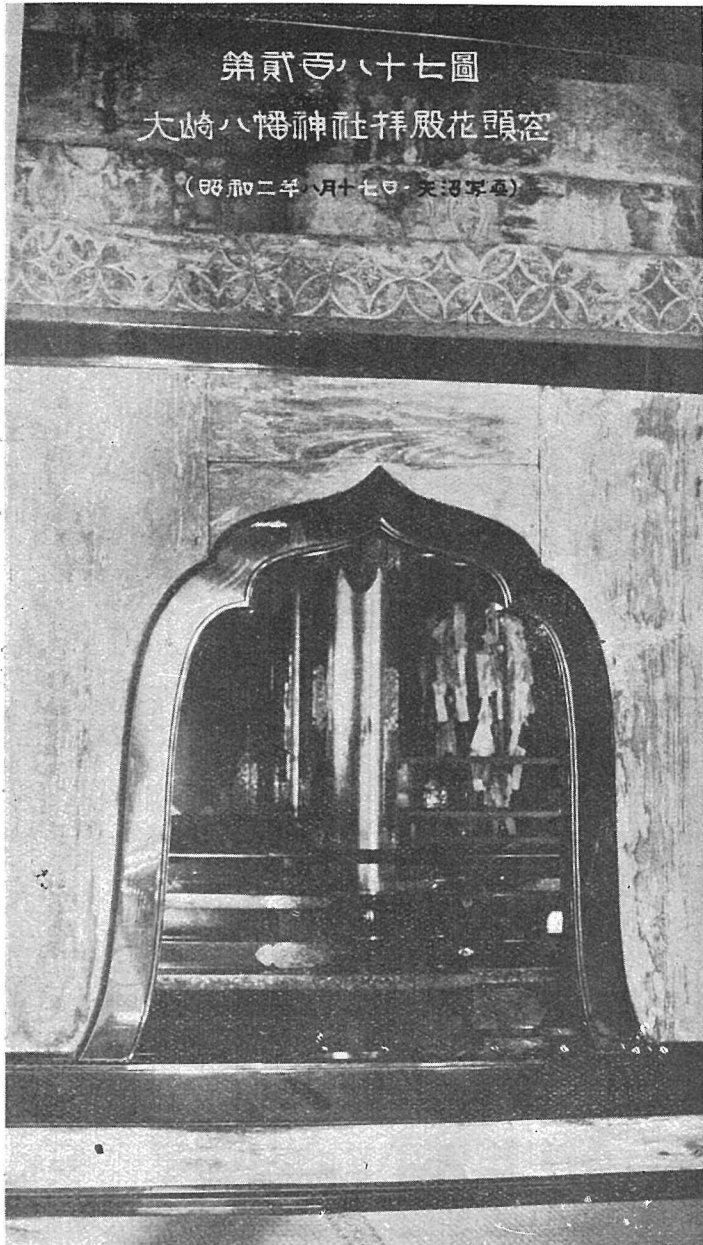
\* \* \* \* \*  
第二八九圖は本派本願寺鴻の間上段の間のである。縦框を眞直にせず下の方で内をむけ、黒漆塗とした上に、美事な毛彫をした飾金具を打つた

ので、高さも幅さも約六尺五寸位づゝあり、大きい事も大きいし、立派なことも立派であるが、形としては大してよくない。

床の間の横、棚との境などに、此頃の新しい建物にもこの様な窓をつけるが、桃山時代位からこんな式を初めたらしいと思はれるのである。但し現代のはもつと拙い形が多い事勿論である。

第二九〇圖は京都府葛野郡松尾村西芳寺の茶室湘南亭の床の後ろので、前に花いけがおいてあり後ろに引違明り障子がたてゝある。茶室の様な建物にそつくり其まゝでは、固苦しすぎて拙いかも知れぬが、この位に軟かくすると、よく調和がとれてゐてよろしい。これは第二九三圖と殆んど同じで、たゞかごの尖り方が少し足りない丈けのことである。

第二九一圖は飛雲閣(初層)上段の間の池に面した方ので、横に平たいところへ唯一つ丈けつけたも



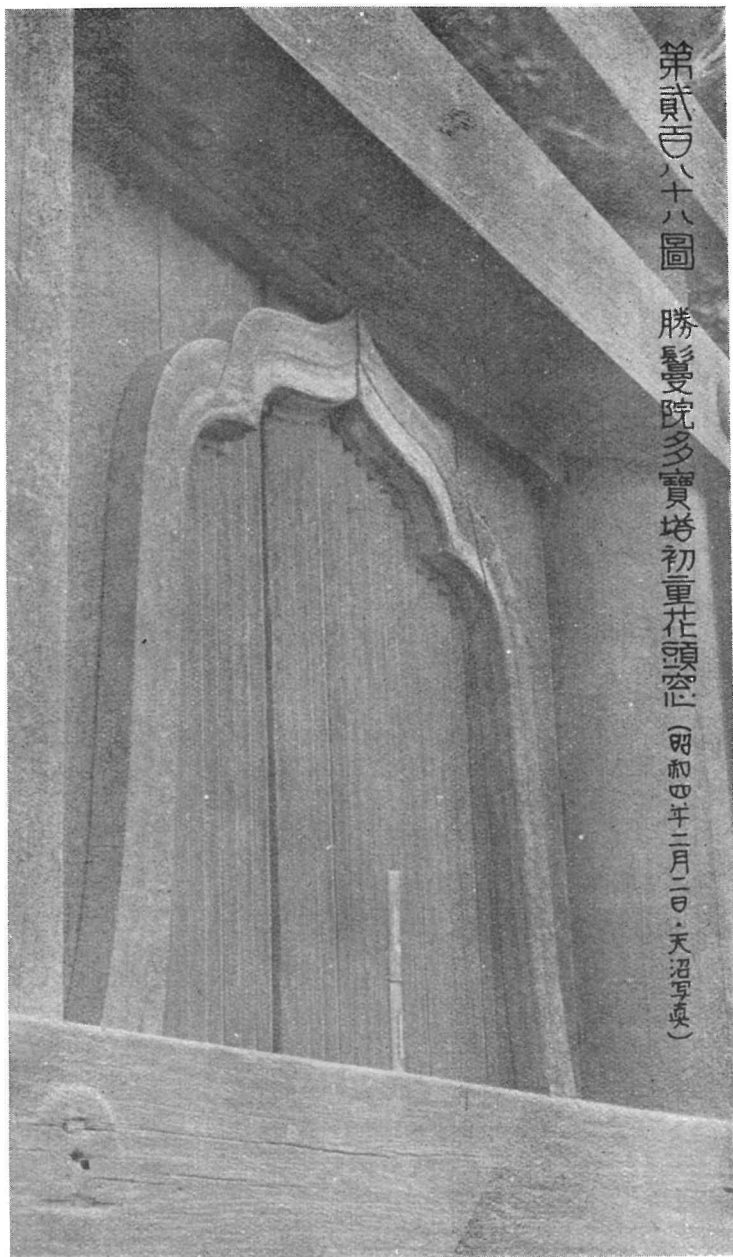
日本古建築研究の契(卅三) (天沼)

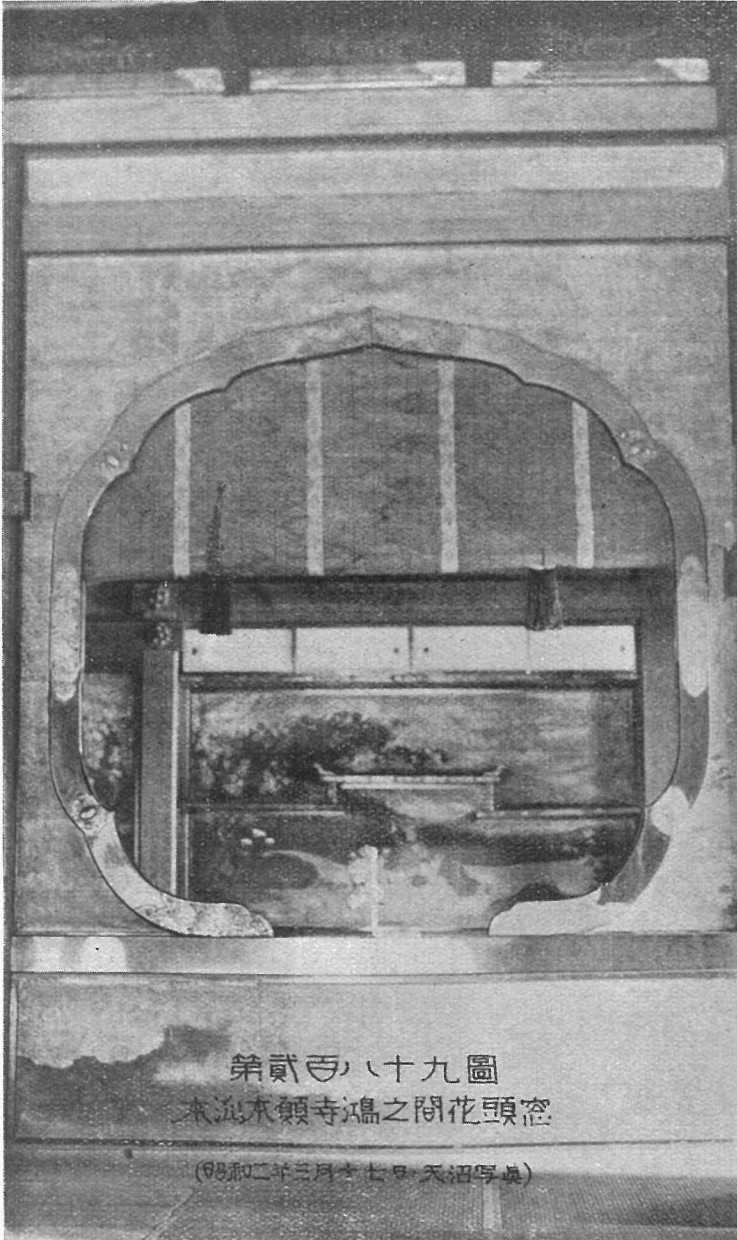
第十五卷 第一號

二〇二

第貳百八十八圖

勝鬘院多寶塔初重花頭窓  
(昭和四年二月二日・天沼亨攝)

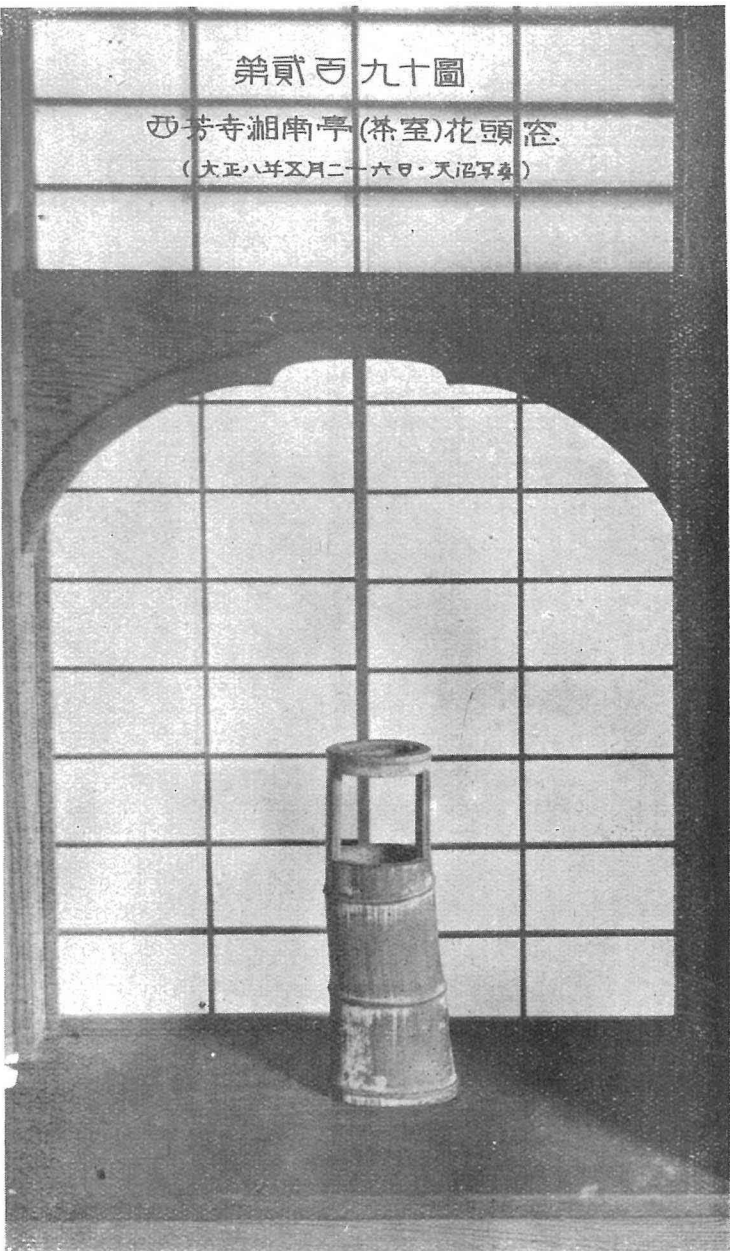




第貳百八十九圖

本泊本願寺鳩之間花頭窓

(昭和二年三月廿七日・天沼写真)



第貳百九十圖

西芳寺湘南亭(茶室)花頭窓

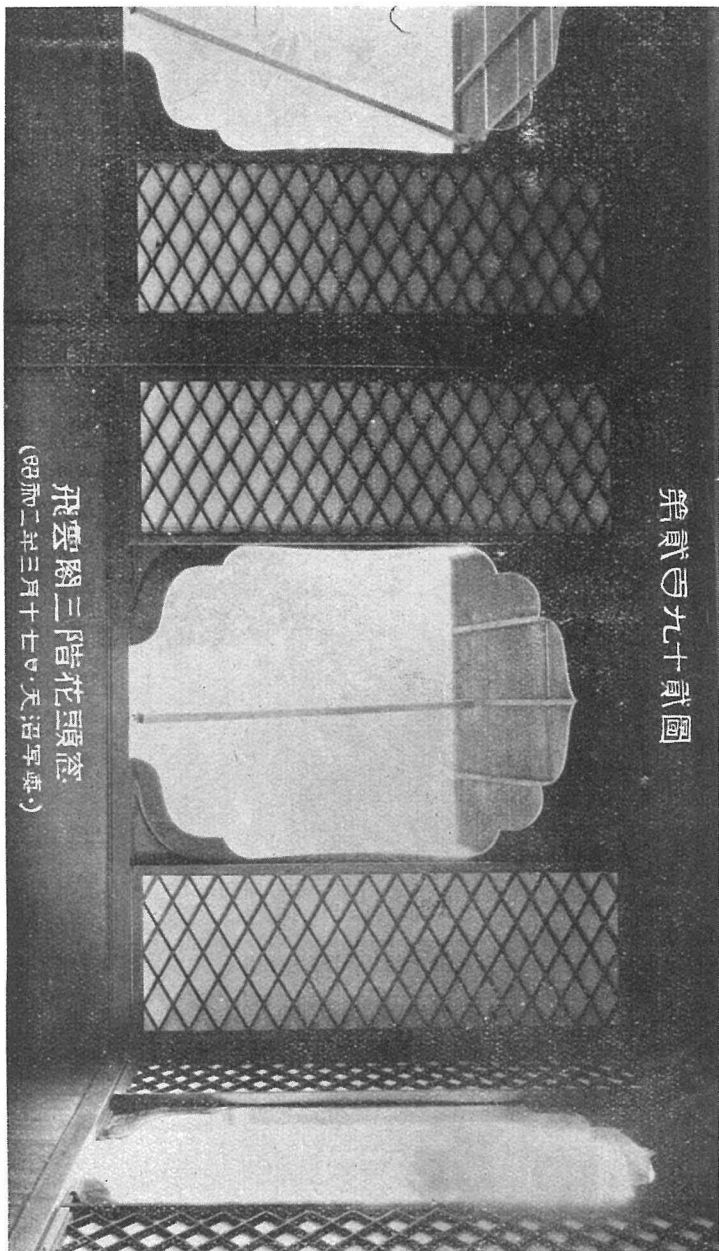
(大正八年五月二十六日・天沼写真)

築貳百九十壹圖



飛雲閣一階花菱景窓二重・(昭和二年三月十七日・天沼写真)

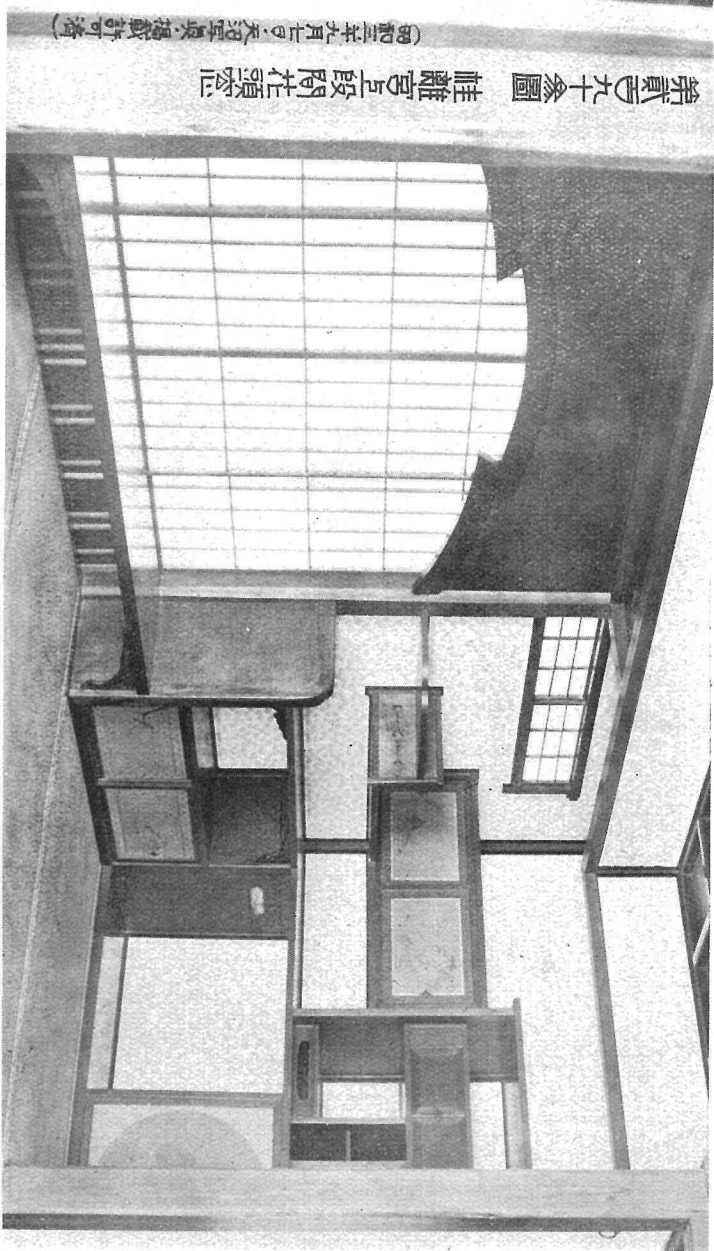
第貳百九十貳圖



飛雲閣三階花型窓

(昭和二年三月十七日・天沼亭蔵)





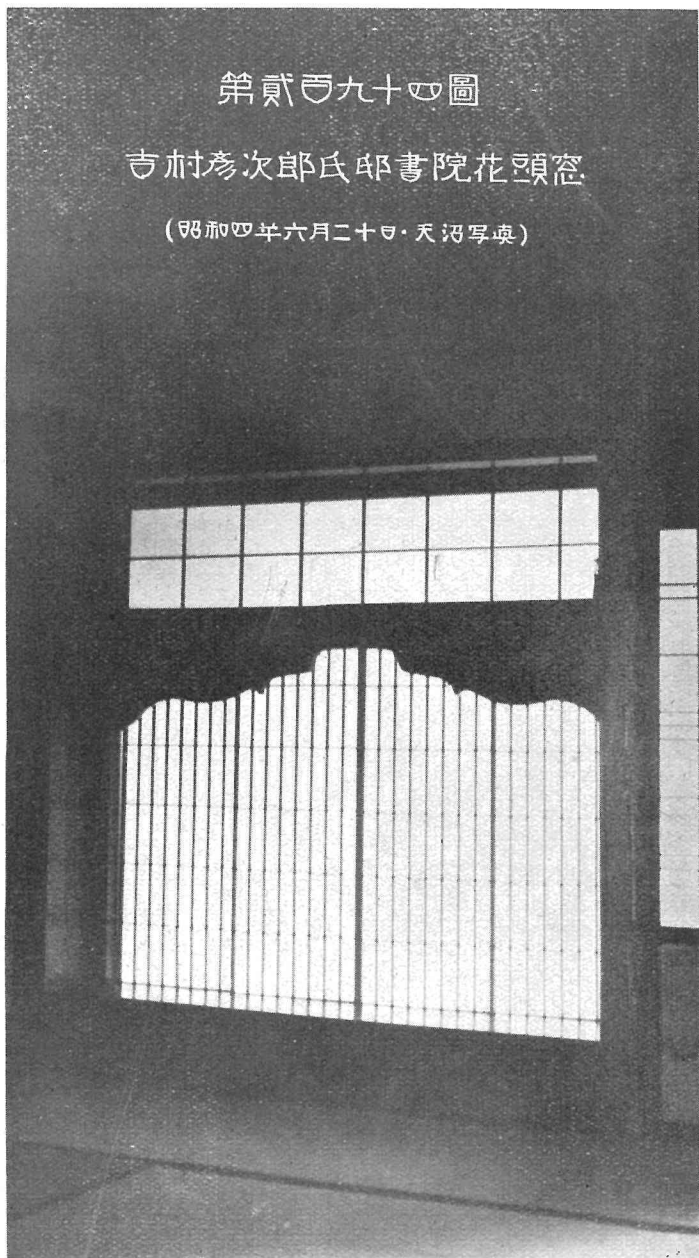
第九十參圖 桂離宮と段岡杜頭念

(昭和五年九月七日、天沼學堂攝、設計者)

第貳百九十四圖

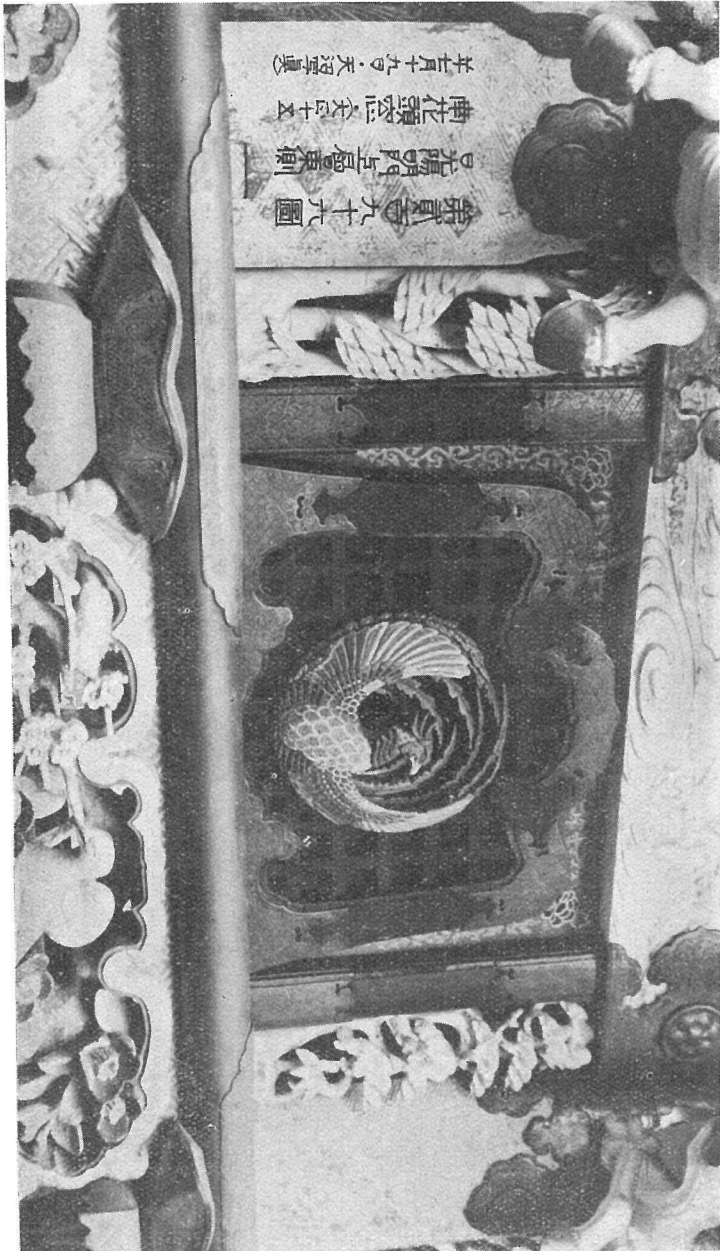
吉村彦次郎氏邸書院花頭窓

(昭和四年六月二十日・天沼写真)

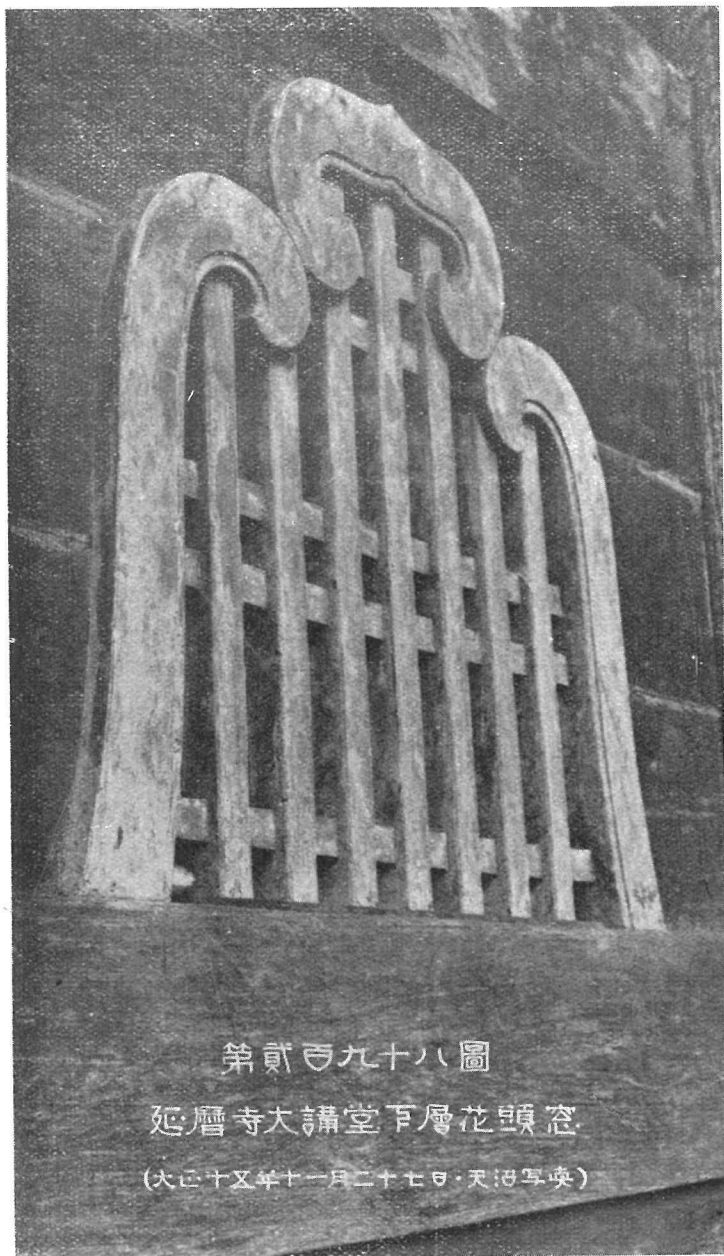




第貳百九十五圖・日光陽明門以原庄屋中央出入口花豆窓(天沼十五坪半中) (天沼)



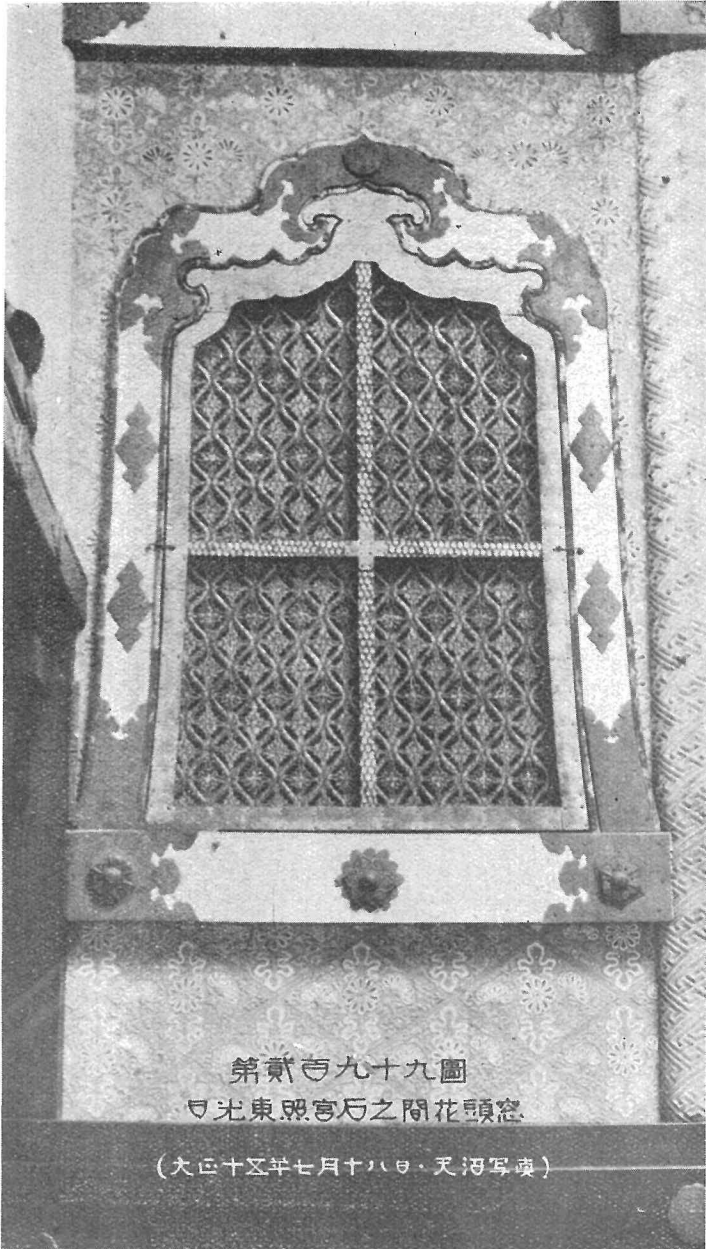




第貳百九十八圖

延曆寺大講堂下層花頭窓

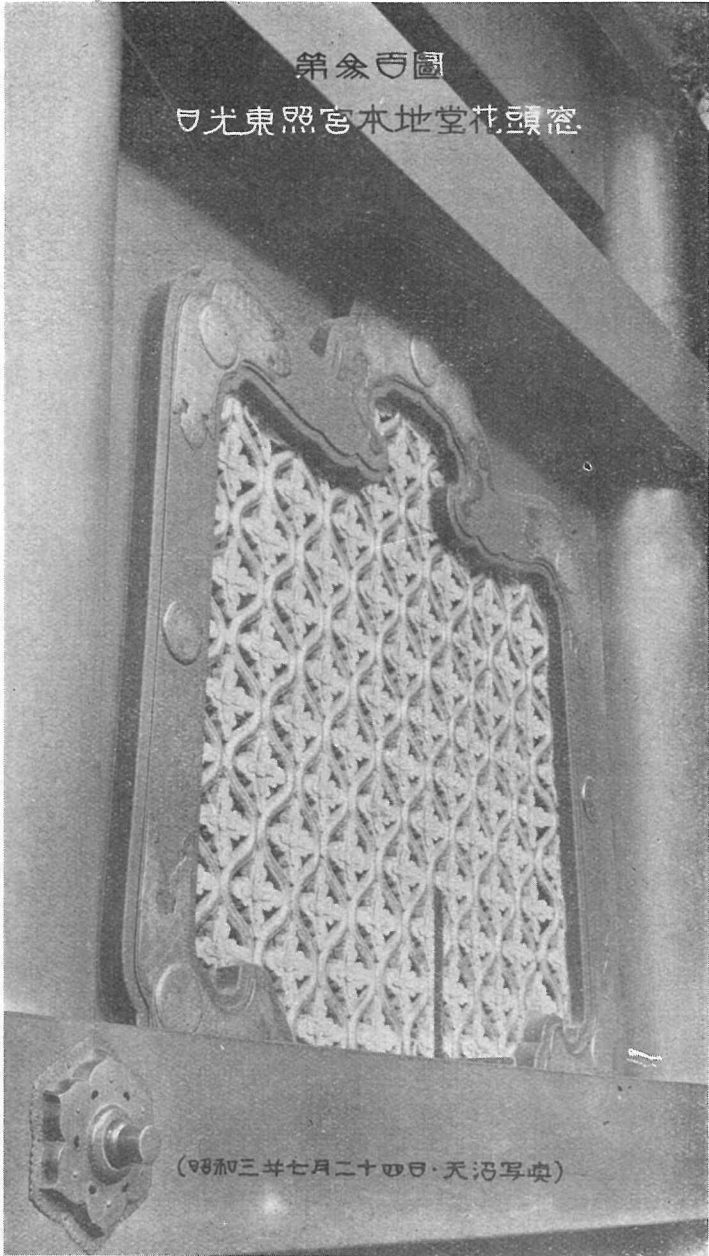
(大正十一年十一月二十七日・天沼写映)



第貳百九十九圖  
日光東照宮石之間花頭窓

(大正十三年七月十八日・天沼写真)



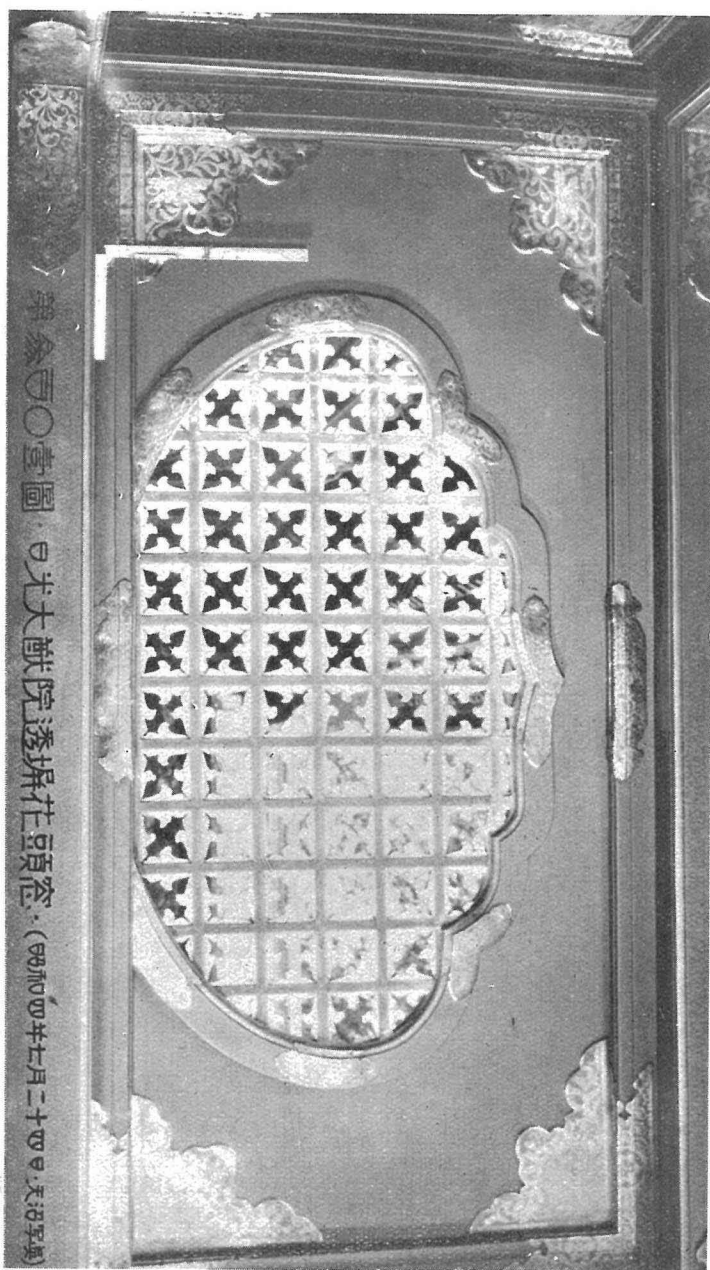


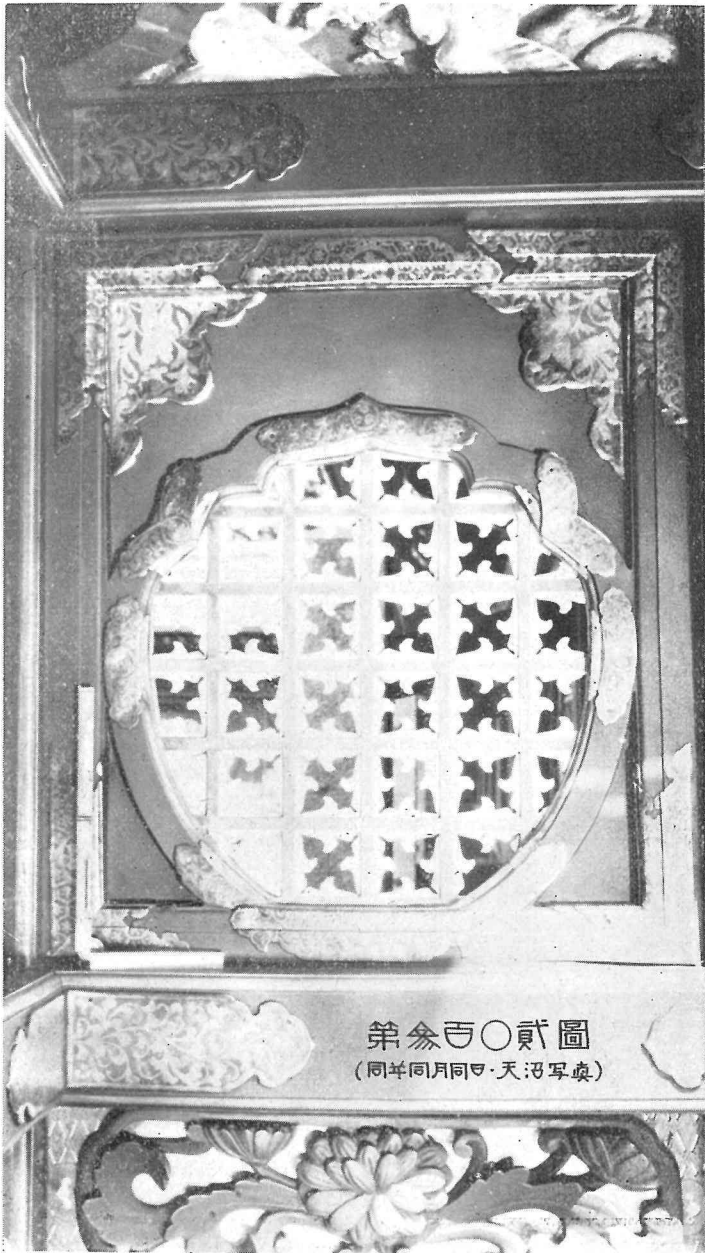
第參百圖

日光東照宮本地堂花頭窓

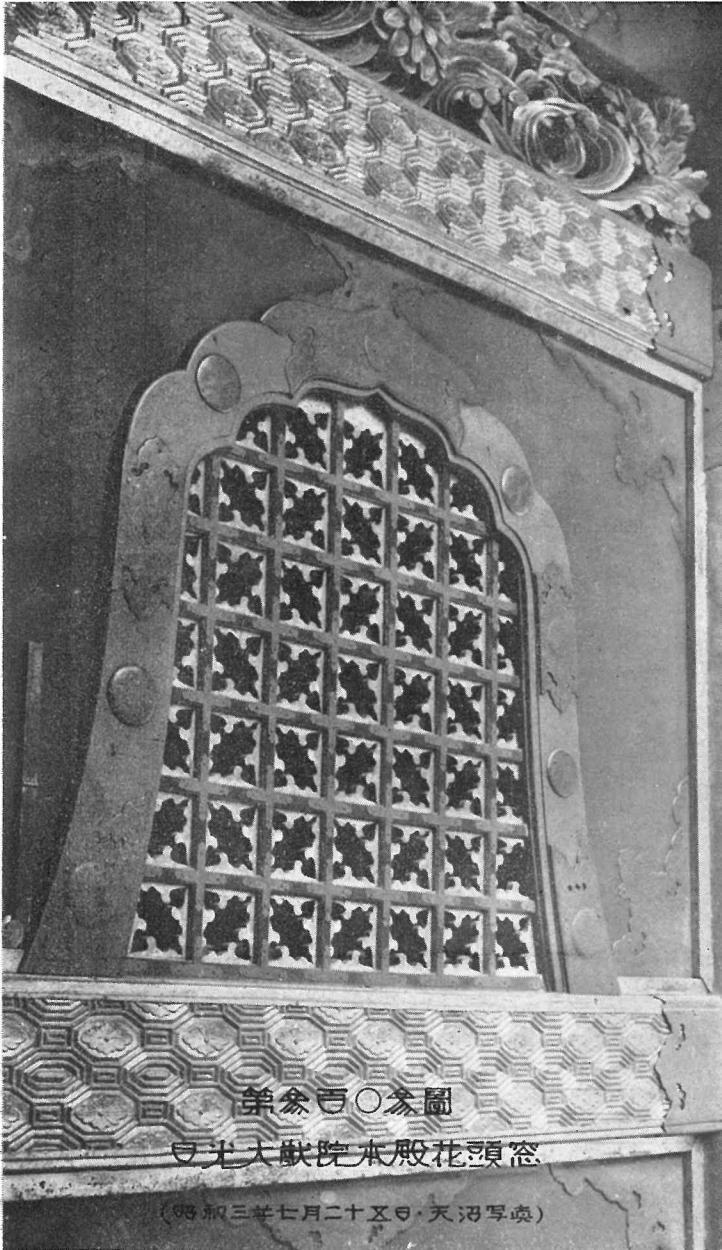
(昭和三年七月二十四日・天沼写映)







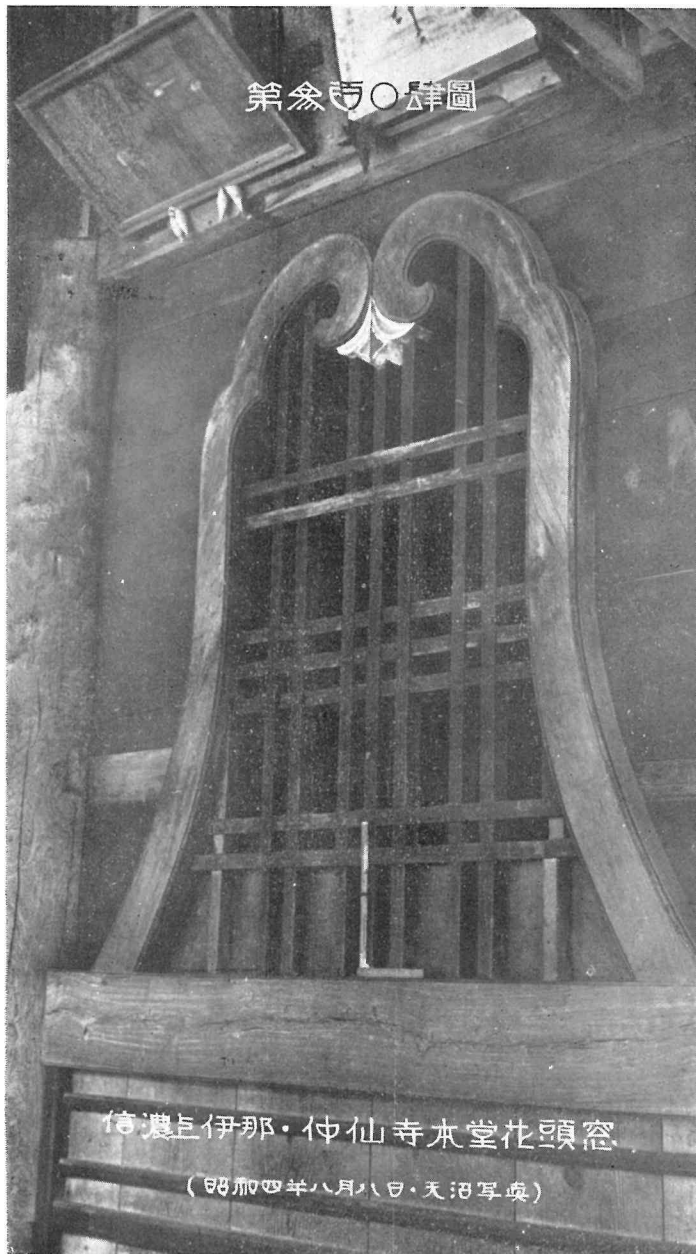
第參百〇貳圖  
(同年月同日・天沼写真)



第參百〇參圖

日光大猷院本殿花頭窓

(昭和三年七月二十五日・天沼写真)



のだから、勢ひこの様になつて了つたのである。餘りつぶれてゐる様で、形としては感心できぬ。

これは次號に例としてだす豫定の同寺五柳間、其二階及び同寺境内百華莊(大谷尊由師住宅)の等と大同小異である。寫眞は正面からとり度く思つたが、場所がなくてとれないので室内からにしたので、まつ黒になつたが反て形ははつきりして見える。

其向て左手にもう一つ寫つてゐるが、これはただ一つ肩に茨がある丈けで、脚は兩方へ反り開いてゐる。あり來りの形であるが、醍醐寺宸殿書院(前號第一一三頁)のより形はよろしいやうである。

次の第二九二圖も亦同じく飛雲閣三階ので、ざつと軍配團扇の様な輪廓であるが、これもよくみると同寺對面所即ち鴻の間のそれ(第二八圖)と同形であり、たゞこれを入れる場所の關係上、獨創的意匠でもなさうとも思つたのか、こんな形にしてあるのである。

第二九三圖は桂離宮上段間のである。既に記した様に茶室湘南亭のと殆んど同じである。これは寛永年間のなさうだから、理窟をいふと江戸時代に入つてゐるのであるが、様式からいへば勿論桃山であるから、便宜こゝへ入れておいたので、取合はせの都合上である。上段の間に棚と書院とをうまく並べ、且つ變形花頭をつけて工合よくおさまりをつけてゐるところに注目すべきである。

書院といふものは、大概の場合板の下に膝を入れることができぬ様になつてゐるから、坐つて書見をするに随分不便だらうと思はれるが、この場合は一枚の板を兩方が持送りを以て支へてゐるから、長い机の様な有様で、膝が一ぱいその下にいたり、至極便利であるのみならず、かうなければならぬのに、今でも書院をつくる人は、例へ古しの様にこゝで書見をせぬ迄も、なせかうしておかぬのか、といつも思ふのであるが、之れは今のとこ

る問題外のことである。

大阪府南河内郡高鷺村大字東島泉にある吉村彦次郎氏邸の桃山座敷書院の花頭を第二九四圖にだしておいた。先年朝日新聞か何かで土間の一部に設けてある召使の室か何かを紹介されてから有名になり、専門家が大勢出かけて行つていろく調べて雑誌へ書いたりしたが、吉村邸のは實はこの花頭より欄間の方が遙に立派で、大和吉野の吉水神社社務所の桃山欄間より一層手のこんだ美事なものである。これは何れ他日圖示するつもりであるが、之れに比べるとこの窓は大に物足りぬ。これは或は江戸時代になつて修補してゐるかも知れぬが、大概よさうだと思つてのせたのである。以上桃山の例十一を列挙したが、これを簡約するとかうならう、即ち

當代は花頭窓の形(肩に茨が一つ又は二つ)及狭間飾(松島瑞慶寺玄關の例)に變つたのができた。時に採光兼裝飾の孔にな

つたり(大崎八幡殿)、細かに裝飾宣連子にしたり(夕陽塔)、框は上等になると黒漆塗に一面に毛彫をした金銅飾金具を打つたり(西本願寺、鴻の間)、いろく

工風をした。邸宅茶室等に應用も盛になり、さう大して儀式張らぬ時は、兩方の柱の間に上框即ち花頭の部分丈けを張り、縦框を略しておく(桂離宮上段間、西芳寺湘南亭)。縦框は普通外方へ反らせるのであるが、反對に内の方に向ひ合はせ、一つ茨をつけたりして、全體としては特殊の形をなさしめたのもあつた(西本願寺鴻の間、同飛雲閣等)。

江戸時代

に入ると一層種々雑多のものができてきたし、應用の範圍も廣くなり、時には曼殊院の場合のやうに柵の下方、地袋と並べて花頭型の輪廓をもつた龕——といふのも變であるが、引込んだところ即ち凹所——をつくつた例等もある位である。以下實例を舉げて記載を試みることにする。

第二九五・二九六圖は日光東照宮陽明門の花頭型出入口と窓とである。一は出入口だから、寫眞の様に閉ぢてある戸を兩方へ開いて了ふ(勿論内開)と内に何もなくなるのは當然であるが、其輪廓は飾金具を打ち充分に裝飾がしてある。さうしてこの様に扉をしめてある時は、其綿板の面に入れてある彫刻は極彩色だし、可なり美事であるが、下からはよく見えぬので、上層へ昇つてそばで觀て感心するより仕方がない。惜しいものである。

窓の方は輪廓は殆んど同じで、たゞ縦框の下の方を内方に曲げて幕股の脚の先の様にしてある丈けの差である。但し内は格子を入れ、中央は極彩色圓形の鳳凰を少しく中高に彫刻したのが入れてある。勿論格子の裏には板を貼つてあるから盲窓であるから、これ亦ほんの裝飾に役立つ丈けのことである。これも亦惜しいことに、下からはさう思つたほど晴たない。

この二圖の上の方の形は、第二九九・第三〇〇圖の夫れと殆んど同じであるし、また陽明門の軒唐破風及び唐門の破風の形と、曲線の意味に於いては洵に似通つたところがある。既に扉の説明のときに綿板を飾つてゐる牡丹唐草のことをかいたが(第十二卷第二號)、あれと同じやうに東照宮の建物を通じて、こんな風に類似の點のある事を、少しく注意するときは、割合に容易に見出し得ることゝ思はれる。

次の第二九七圖は決していゝ形のものとはいへないが、様式の異なるのと應用の場所が奇抜なことで、確かに先人未發といへるであらう。これは東京芝の徳川二代靈廟のうち、最南端に少し離れてある八角二重の建物なる奥の院へ、拜殿の横から參拜する道の左手にある四脚門——今は柵がしてあつて實用にはしてゐない。昔しできた『東京芝三縁山増上寺境内全圖』には御成門とかいて

あるから、將軍はこの門から出入したのかも知れない——の、本柱と扣柱との間にある板壁の内側腰貫と上貫との間の廣い面積のところへ、全く裝飾のためにつけたものである。

當初は合計四つあつたが、今一つとれてなくなり三つ残つてゐる。旨連子の中央に圓紋がついてゐるが、其圓紋の内の模様が一つ一つ異なつてゐる。内側より向て左手前が梅、右手前が松、夫れから本柱の向ふ側の松の並びが牡丹、梅の並びで牡丹の向ひのがとれて亡くなつてゐるのである。だから何が圓紋内にあつたか判らぬが、想像すると恐らく竹であつたらうと思ふのである。

其輪廓圖の如く、いやに下が大きく、中央花頭のところが上に尖つてゐぬから、ごことなしに間が抜けてゐる。兩肩の内側の茨は發達して先きが二つに分れ、下部即ち兩脚の先きも亦左右に分れて末端は若葉になつてゐるが、下が大きくすぎる傾

がある。これは無理に本柱と扣柱との間におさめやうとした結果である。

挾間飾は連子で其中央に圓紋をだし、其内には「松」が入れてある。既に記した様に其向ひは「梅」で、松の隣りが「牡丹」であるが、前二者は幹も枝も現はしてゐるのに、第三のものは満開の花をまん中に入れてある丈けである。それで亡くなつた最後の「竹」であるとして、ごんな模様であつたかを想像すると、前二者と同じ様に幹を割合に太くしてそれに葉をあしらつたものであつたらう。

形がいゝとか拙いとかは別として、花頭窓としてこの位變つた、さうしてこの様な所にこんな風に用ひられてゐるのは、恐らく澤山はあるまい。寫眞は三枚とも要意はしたが、ただ圓紋内丈けが異ふのだから、圖には一枚丈けだしておいたのである。

第二九八圖は比叡山延曆寺大講堂下層四隅の窓



である。中には太い格子を入れ、總てが頑丈であり、あの堂にはよく似合つてゐる。但し其輪廓は頗る物足りない、もう少し何とかなりさうなものだといふ感がする。唐様が主でそこへ和様の要素をとり入れ、うまくやつてのけたのだから、全體としてこの花頭はみるべきで、かうやつて花頭丈けを取出してみると、上の墓殿と共に褒められない形をしてゐる。

次は第二九九圖。日光東照宮石の間側面のもので、これは西側のをとつたのである。其輪廓は陽明門(第二九五・第二九六圖)のに殆んど同じであることは、圖を比べてみれば誰人も首肯するであらう。其輪廓には精巧なる幾何模様がほりつけてあり、飾金具も數が多く形も複雑で、其面には全體に毛彫が施してある。狹間飾——立涌(Tate-waku)といつても網模様といつてもよからうが——の中には一つ一つ花を入れたもので、色彩は輪廓は白、飾金具及立涌

は金、花は緑と青と互ひ違ひにしてあるから、光彩陸離で、それはそれは實に美しいのである。餘り狹間飾が立派すぎるせいにか、餘りきゃしゃだからそれを保護するためであらうか、金屬製の枠に金網をはつたものを上からあてゝある。立派にするのも程度問題で、度を過すと始末に悪くなるものである。

第三〇〇圖は同じく東照宮本地堂のものである。其輪廓亦陽明門のもの又は前圖のごとく似てゐる。狹間飾亦前圖と同じで、ただ立涌(網模)内の花模様は少し簡單になつた丈けのことである。本地堂と石の間とでは、窓にこの位の差があつてもいゝ次第である。

第三〇一・三〇二圖は同じく日光大猷院本殿周圍の透塀についてある花頭窓で、狹間飾として花狹間が入つてゐる。前者は普通のところだが、後者は正面中央唐門に近い折れ曲りのところなので、

柱間が狭いため、形は随分に變つてしまつた。これは花頭と見ないで、香狹間と考へた方がいゝといふ人があるかも知れぬが、さうしても勿論差支ないのである。

さう考へると今度は花頭窓や花頭型出入口は、何も宋の國等を引合に出さないでも、香狹間の兩方の輪廓を内方に向ける代りに、兩肩の邊から垂直に下方におろして下へばできるから、さういふ風にしてできたとした方が、我が建築家の獨創的意匠が働いたことになつて工合もよろしくなる。敢て宋の國ばかりではない、サラセン建築の窓などを全然考へないでもいゝことになる。

こんな事を論じてゐると長くばかりなつていけないから、更に他日に譲る——本誌に香狹間のこととかく折があつたら其時、なければまたいつかいゝ折のあつた時迄のばす——事にして、とにかく今は花頭窓として考へておく。

第三〇一圖の様な形は澤山あるが、第三〇二圖の様なのは二つきりである。いくら何ぼ何でも其ため特別の金具をつくるのはやめにしたのか、或は忘れてゐていざとなつてから間に合はぬのでやめたのか、其邊の事は知らぬが、後者の兩肩の飾金具は、前者に適する様に作つたのを其まゝ用ひてある。これは東照宮の様な贅澤はできぬにしても、三代將軍の廟としては少しくぞんざいの様な氣がする。尤も私も態々變つた花頭を探して歩いたから見付けたので、たい歩いて見物した丈けでは中々この様な所迄はわからない、さう思へばこれでもいゝわけである。

第三〇三圖は同じく本殿ので、形は普通だが、たい中に入れた花狹間の格子の交叉點に十字形の飾金具を打ち、四角な目のうちの花模様も群青と緑青との彩色をしたゝめ、大層綺麗になつた丈けの差である。

注意すべきは透塀の花頭もこれも、狹間飾を同一にしたことで、意匠につきた仕事と解釋してはいけない。苦心をしてこの様にして連絡を保たしめたので、随分考へた結果であらう。東照宮の水屋から陽明門を通り唐門を入れて拜殿の向拜、夫れから後方へかけての白色の取合はせ、陽明門・鐘樓・鼓樓・經藏・本地堂・石之間本殿等の花頭窓の形等、すべてこの様な考への下にできたと思はれる。既に扉のところで述べた牡丹唐草またさうである。

第三〇四圖は長野縣上伊那郡西箕輪村大字羽廣の仲仙寺本堂の夫れである。其形は決してよくはない。考へすぎて變なものにしてしまつた、だからこれはいゝ方の例としてだしたのではない。

併しながら聊變つたところは、格子を縦横共三と二と吹寄せにしたこと、頂上を下の方へ巻き込んでそこを齒懸魚の「き取扱をして——多分其

種の懸魚から考へついたのであらう——珍らしく見せたのである。この様なものも存在をしてゐるといふことを知らせるために圖示したのである。頂上を下の方へ曲げて蕨手にしたとき、そこに何かつけぬと納りがよくない、そこでいろいろつついてゐるうちに、こんな形ができたのかも知れない。兩脚は反りすぎてゐるが。田舎の大工の仕事にしては考へてゐる。

\* \* \*

前號と同じく今回も亦江戸時代の途中でやめておくことになつた。次號で花頭窓完結の豫定。

(昭和四年十二月十二日稿了)